資料

衝動的行動質問紙の作成と衝動的行動に影響する パーソナリティ特性との関係性の検討

同志社大学文学研究科 山口 麻衣
同志社大学文学部 鈴木 直人

**Development of the Impulsive Behavior Questionnaire, and examination of the relationship
between each impulsive behaviors and personality traits**

Mai Yamaguchi

*Graduate School of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University,
Kamigyo-ku, Kyoto, 602-8580*

Naoto Suzuki

*Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University,
Kamigyo-ku, Kyoto, 602-8580*

Impulsive behaviors are one of the major problematic behaviors. The purpose of this study was to develop an Impulsive Behavior Questionnaire and determine the relationship between impulsive behaviors and personality traits. Study 1 (N=417) used a 35-item questionnaire measuring each of five components of impulsive behavior: physical aggressive behavior, verbal aggressive behavior, indirect aggressive behavior, abandonment/panic behavior, and impulse buying behavior. Five impulsive behavior subscales emerged clearly from exploratory factor analysis. Study 2 (N=353) used a 25-item questionnaire and a replicated factor structure and factor loading similar to Study 1 was obtained. The scales were high in internal consistency. In addition, this study examined the effect of personality traits (extraversion, neuroticism, disability of attention control, aggression, and reflectivity) on impulsive behavior. The results suggested that differences in impulsive behavior varies by personality trait, suggesting that impulsive behavior might be able to classified by the type.

Key Words: Impulsive behavior, personality traits, aggressive behavior, abandonment/panic behavior, impulse buying behavior.

序 論

衝動的行動に関する初期の研究は、衝動的行動を引き起こす特性を測定する質問紙の開発を目的としてきた。例えば、I₇ (Eysenck, Pearson, Easting, & Allsopp, 1985) や Barratt Impulsiveness Scales ver.11 (BIS-11; Patton, Stanford, & Barratt, 1995) などが挙げられる。最近の研究では、I₇やBIS-11のような質問紙によっ

て測定された衝動的行動特性が課題によって喚起した衝動的行動の生起を予測できるのかを検討している。しかしながら、質問紙によって測定した衝動的行動特性と課題によって喚起した衝動的行動との関係に関しては、一貫した結果が得られていない (e. g., Crean, de Wit, & Richards, 2000; Dougherty, Bjork, Marsh, & Moeller, 2000)。

この原因として、Evenden (1999) やParker, Bagby, & Webster (1993) は衝動的行動の概念あるいは定義が幅広く、研究間で一致していないことを指摘している。これまでの研究では、衝動的行動は不適切な反応の抑制の欠如 (e. g., Barkley, 1997)、熟慮しない傾向や判断のすばやさ (e. g., Ainslie, 1975)、そして強化を遅延される状況や不確かな状況に対する耐性の低さ (e. g., Mischel, Shoda, & Rodriguez, 1989) などの現象を示すものと定義されてきた。このように、衝動的行動にはさまざまな側面が複雑に絡み合っていると考えられる。初期の研究に見られた衝動的行動を特性として捉えようとする試みは有益であるように思われる。しかしながら、上記のように衝動的行動は研究者によって操作的定義が異なるため、Barratt & Patton (1983) やParker et al. (1993) は、既存の衝動的行動を測定する質問紙は結果として全体としての衝動的行動というよりは、衝動的行動のある側面を測定しているに過ぎないということを指摘している。さらに、Malle & Neubauer (1991) は、従来の質問紙研究で扱われた衝動的行動は、測定した側面があいまいであるため、衝動的行動の側面を規定せずに衝動的行動という用語を使用することは不適切であると述べている。このように、質問紙によって測定された衝動的行動特性と課題によって喚起した衝動的行動との間の関係に一貫性が見られないのは、質問紙が測定している衝動的行動の側面と課題によって測定された側面との間にズレが生じていたためと考えられる。

前述したように、衝動的行動にはさまざまな側面が含まれていると考えられるが、これまでの多くの研究では衝動的行動のさまざまな特性を定義しないまま、衝動的行動と性格特性あるいは行動特性との関係性を検討している。例えば、Eysenck et al. (1985) は彼らが作成した尺度の中で衝動的行動を外向性の下位概念として捉えてきた。そのような経緯から衝動的行動と外向性との間には正の関係性が考えられてきた。しかしながら、Edman, Schalling, & Levander

(1983) は衝動的行動と外向性との間に有意な関係性がみられなかったという報告をしている。Bachorowski & Newman (1990) やWells (1994) は、神経症傾向が高い人は時間制限によるストレス操作がなされた状況では、能力が制限されると報告している。彼らの報告から考えると、衝動的行動と神経症傾向の間には正の関係性が存在することが予測される。Shapiro & Lim (1989) は注意が周囲に移行しやすい傾向が高い人は、他の刺激によって干渉を受けやすく、集中すべき刺激に対して注意することが困難であることを見出している。また、Dickman (1993) は空間の至るところに注意を移行する傾向が高い人は衝動的行動が生じやすいことを報告している。このような観点から、注意をすぐに移行させてしまう傾向と衝動的行動との間に正の関係性が推測される。また、Barratt, Stanford, Kent, & Felthous (1997) は攻撃行動には2つのタイプが存在することに言及している。1つのタイプは非意図的で情動的に生じる攻撃行動で、抑制やコントロールの効かない行動であり、もう一つは意図的で道具的な攻撃行動である。彼らは前者を衝動的攻撃行動と考えている。このような衝動的攻撃行動と攻撃性との間の正の関係性は多くの研究で言及されてきた (e. g., Convit, Czobor, & Volavka, 1991; Houston & Stanford, 2005)。Kagan (1965) は、不確かな状況下で判断が遅ければ熟慮的、判断が早ければ衝動的であるという仮説の下で研究を行い、その仮説を支持する結果を示した。つまり、彼の研究から衝動的行動と熟慮性との間には負の相関関係が考えられる。このように、従来の研究では衝動的行動と外向性、神経症傾向、注意を移行させやすい傾向、攻撃性、そして熟慮性との関係性が示唆されているが、さまざまな側面で構成されている衝動的行動のどの側面と上記に挙げた変数が関係しているかは明らかとなっていない。

衝動的行動の研究における問題をまとめると、第一に、衝動的行動の定義が一致していないため研究間で一貫した定義や測定方法が確立され

ていないことが挙げられる。第二に、衝動的行動にはさまざまな側面が含まれているにも関わらず、それらの側面を考慮せずに研究が行われてきたということが挙げられる。このように、従来の研究では衝動的行動の概念の捉え方が漠然としていたために、研究間で一貫した結果が得られなかった可能性が考えられる。そこで、本研究ではこれまでの研究に基づいて、衝動的行動を“何らかのきっかけによって生じる、非意図的で、突発的で、無計画な行動”と定義した。また、本研究では衝動的行動そのものに焦点をあて、衝動的行動のタイプの分類を試みた。衝動的行動を行動レベルで検討することによって、従来の研究に見られるような研究間の不一致を解消することが可能になると考えられる。また、その分類に基づいてさまざまなタイプの衝動的行動の起こしやすさを測定する尺度を作成することを目的とした。さらに、分類された衝動的行動と従来の研究において衝動的行動と関連するとされてきた外向性、神経症傾向、注意を移行させやすい傾向、攻撃性、熟慮性との関係性を確認することを目的とした。

調 査 1

目的

本調査は、自由記述によって収集した衝動的行動を分類し、どのようなタイプの衝動的行動を起こしやすいかを測定するための尺度の項目を作成することを目的とした。

方法

調査参加者 本調査では、大学生417名（男性215名、女性202名）を対象とした。平均年齢は19.32歳（ $SD=1.08$ 歳）であった。

質問紙 大学生85名（男性36名、女性49名）を対象とした予備調査においてさまざまなタイプの衝動的行動を自由記述により収集し、KJ法を用いて5種類に分類した。攻撃行動（身体的攻撃行動・言語的攻撃行動・物にあたる行動）の分類に関しては、攻撃行動に関する先行研究（e. g., Buss & Perry, 1992）に基づいて決定し

た。また、放棄・パニック行動を採用したのは回答数が多かったことと、攻撃行動を含まない衝動的行動を想定することが有益であると考えたからである。衝動買い行動に関してはすでに衝動的行動研究の1分野として研究が行われている（e. g., Weun, Jones, & Beatty, 1998）ことから、この分類を採用した。その結果に基づいて5種類の衝動的行動を各7項目ずつ、計35項目をランダムに配置した衝動的行動質問紙を作成した。この質問紙は先行研究において提案されてきた定義を被調査者に対してわかりやすく表現するために、各項目に示した行動を“突発的で、無計画で、あまり考えずに”行った程度を回答するように教示した。なお、回答形式は5件法（1. 全くないー5. 非常によくする）であった。

手続き 心理学の講義終了後に質問紙を配布し、集団法にて回答させ、その場で回収した。

結果および考察

本調査における分析では欠損値を含む回答を削除し、最終的に390名（男性193名、女性197名）の回答を対象とした。なお、本調査における分析はすべて統計パッケージSASを使用した。

衝動的行動質問紙の35項目に関し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化（第1因子から順に5.77、2.44、1.74、1.46、1.43、1.25、以下略）、予備調査において5因子を想定していたこと、そして解釈可能性の観点から5因子解を採用した。また、単純構造を得るために複数の因子に対して.30以上の負荷量を持つ項目、負荷量が.30以下の項目を7項目削除し、5因子解を指定し、再び因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、第1因子は身体的行動、第2因子は物にあたる行動、第3因子は言語的攻撃行動、第4因子は放棄・パニック行動、第5因子は衝動買い行動と命名した。因子間相関は、身体的攻撃行動と物にあたる行動間で-.32、物にあたる行動と言語的攻撃行動間で-.30、他の組み合わせでは-.21から.20の間であった。この5因子をそれ

ぞれ衝動的行動質問紙の下位尺度とし、各尺度の内的整合性を確認するためにChronbachの α 係数を算出した結果、第1因子から順に、.81、.79、.68、.72、.64であった。

最終的に基準を満たした各因子5項目ずつを下位尺度項目として選択し、計25項目からなる衝動的行動質問紙を作成した。

調 査 2

目的

本調査は、調査1において作成した衝動的行動質問紙の各下位尺度とパーソナリティ特性との関係を検討することを目的とした。この関係性を検討するために、従来の研究において衝動的行動との関係性が示唆されてきた外向性、神経症傾向、注意制御不全感、攻撃性、そして熟慮性を使用した。

方法

調査参加者 本調査は、大学生353名(男性181名、女性172名)を対象とした。平均年齢は18.73歳($SD=0.98$ 歳)であった。

質問紙 質問紙は以下の5種類を使用した。

1. 衝動的行動質問紙は、調査1で作成したものであり、25項目で構成されていた。様式は調査1と同様であった。

2. NEO Five Factor Inventory日本語版(NEO-FFI; 下仲・中里・権藤・高山, 1999)は神経症傾向と外向性を測定するために使用した。各12項目で構成されており、回答形式は5件法(1. 全くあてはまらないー5. 非常にあてはまる)であった。

3. 日常的注意経験質問紙(篠原・小高・三浦, 2002)は、注意の欠損を測定するために使用した。この質問紙は5つの下位尺度によって構成されているが、本調査ではその中の注意制御不全感(6項目)を使用した。注意制御不全感は“気になることがあると、そのこと以外に注意が向かなくなる”や“人と話をする時、ついまわりの出来事にじゃまされて、話し相手の言葉から注意をそらしてしまう”といった項目

で構成されており、注意を向けるべきところに向けることが困難であり、なおかつ他の対象に注意を移行させやすい傾向を示すものである。回答形式は5件法(1. 全くあてはまらないー5. 非常にあてはまる)であった。

4. 日本語版Buss-Perry攻撃性尺度(BAQ; 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999)は、攻撃性を測定するために使用した。この質問紙は4つの下位尺度(短気、敵意、身体的攻撃性、言語的攻撃性)で構成されており、計24項目であった。回答形式は5件法(1. 全くあてはまらないー5. 非常にあてはまる)であった。

5. 認知的衝動性—熟慮性尺度(滝間・坂元, 1991)は10項目で構成されており、合計得点が高いほど熟慮的であり、得点が低いほど衝動的であるとされている。ただし、この質問紙の項目内用はほぼ熟慮性に関するものであると考えられるため、本調査ではこの尺度を熟慮性の指標として扱った。回答形式は4件法(1. 全くあてはまらないー4. 非常にあてはまる)であった。

手続き 本調査は、心理学の講義の後に配布し、1週間の提出期限を設けて回収した。

結果および考察

本調査では1つでも欠損値のあったデータをすべて削除したものを使用した。よって、最終的に大学生276名(男性143名、女性133名)のデータを分析に使用した。

衝動的行動質問紙の25項目に関して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った(Table 1)。その結果、初期解で1.0以上の固有値が5つあったこと(第1因子から順に6.17、4.19、2.44、2.04、1.43、0.89以下省略)、ならびに調査1において5因子が抽出されていたことから5因子解を採用した。各因子は第1因子から順に、衝動買い行動、身体的攻撃行動、言語的攻撃行動、物にあたる行動、放棄・パニック行動に該当するものであった。いずれの項目も複数の因子に重複して負荷することなく、1因子の

Table 1 衝動的行動質問紙における因子負荷量および因子間相関

	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
<u>第 1 因子：衝動買い行動</u>					
15. あまり考えずに買い物をしてしまう	.94	-.04	.02	.05	-.03
10. あまり考えずにお金を浪費してしまう	.89	-.05	.02	.02	.03
5. 必要のないものを買ってしまう	.84	.05	-.06	-.04	.01
25. 買い物リストにないものを買ってしまう	.79	.03	.01	.03	.01
20. 興味のあるものを見つけると、つい買ってしまう	.79	.05	.01	-.09	-.01
<u>第 2 因子：身体的攻撃行動</u>					
7. 相手に平手打ちをする	-.05	.83	-.01	-.01	-.08
2. 相手を殴ったり、蹴ったりする	-.07	.76	.19	-.10	.00
17. 相手を近くにあるもので殴る	.03	.73	.03	.05	.02
12. 相手に対して刃物を向ける	.06	.66	-.15	.06	-.03
22. 原因とは全く関係のない人に対して暴力をふる	.10	.63	-.01	.06	.05
<u>第 3 因子：言語的攻撃行動</u>					
6. 相手の行動を非難するようなことを言う	.04	-.03	.83	.02	-.01
16. 相手に対して、批判的な意見を言う	-.02	.02	.82	-.03	.03
11. 相手の言い分を無視して、非難する	.01	.12	.68	.00	.01
1. 相手に思っていることを言い返す	-.03	-.03	.59	-.04	-.08
21. 乱暴な言葉遣いで、文句を言う	.00	-.05	.51	.28	.10
<u>第 4 因子：物にあたる行動</u>					
24. 近くにあるものを机や床にたたきつける	.01	-.03	-.09	.87	-.05
9. 壁や机などを殴る	-.04	.13	.03	.73	.00
19. 床をドンドンと踏み鳴らす	-.03	.09	-.04	.65	.02
14. ドアをボタンと大きな音を立てて乱暴に閉める	.01	-.15	.22	.63	-.07
4. 近くにあるものを投げつける	.01	.29	.02	.51	.08
<u>第 5 因子：放棄・パニック行動</u>					
18. その状況から離れようとする	.03	.02	-.06	.04	.65
3. 何をしているのかわからなくなる	-.10	.00	-.03	-.01	.64
23. そのことだけに集中してしまい、他のものが見えなくなる	.00	.01	-.02	-.06	.61
8. 頭が真っ白になる	.06	-.01	-.01	.05	.58
13. もういいやと思い、していた行動をとめてしまう	.05	-.07	.12	-.06	.51
因子間相関	F 2	-.18	—		
	F 3	.21	-.12	—	
	F 4	.09	-.39	-.21	—
	F 5	-.31	.02	-.09	-.28
					—

みに高い因子負荷量を示しており、単純構造をなすことが明らかとなった。この結果から、衝動的行動質問紙の因子構造は再現性の高いものであるということが確認された。さらに、衝動的行動質問紙の25項目に関して、確認的因子分析を行った結果、GFI=0.89、AGFI=0.87、CFI=0.92、RMSEA=0.05であり、因子の適合度も良好であった。各下位尺度の内的整合性を確認するためにChronbachの α 係数を算出したところ第1因子から順に、.93、.85、.83、.84、.73であ

り、十分な信頼性が確認された。したがって、最終的にこの5つの下位尺度を含む25項目を衝動的行動質問紙の項目と決定し、以下衝動的行動質問紙と呼ぶこととする。衝動的行動質問紙および外向性、神経症傾向、注意制御不全感、攻撃性、熟慮性の各尺度の平均値および標準偏差をTable 2、各変数間の相関係数をTable 3に示した。なお、各変数の平均値に関しては、平均値を項目数で割ったものを使用した。

各衝動的行動とパーソナリティ特性との関係

Table 2 衝動的行動質問紙およびパーソナリティ特性の平均値および標準偏差

	<i>M</i>	<i>SD</i>
衝動的行動質問紙		
衝動買い行動	2.64	1.18
身体的攻撃行動	1.35	0.60
言語的攻撃行動	2.87	0.89
モノにあたる行動	2.20	1.00
放棄・パニック行動	3.02	0.87
パーソナリティ特性		
外向性	3.44	0.55
神経症傾向	3.59	0.65
注意統制不全感	3.35	0.61
短気	3.05	0.89
敵意	3.23	0.69
身体的攻撃性	2.99	0.87
言語的攻撃性	2.97	0.82
熟慮性	3.43	0.83

Table 3 各変数間の相関関係

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1. 衝動買い行動	.31***	.31***	.30***	.30***	.13*	.04	.18**	.20**	.08	.12*	.07	-.25***
2. 身体的攻撃行動	—	.32***	.40***	.16**	-.09	.09	.18**	.20**	.17**	.24***	.09	-.03
3. 言語的攻撃行動		—	.45***	.35***	.04	.22***	.23***	.42***	.31***	.27***	.39***	-.10
4. 物にあたる行動			—	.37***	-.01	.20***	.19**	.50***	.19**	.25***	.19**	-.10
5. 放棄・パニック行動				—	-.11	.47***	.47***	.38***	.26***	.11	-.02	.04
6. 外向性					—	-.14**	-.04	.01	-.25***	-.04	.28***	-.12*
7. 神経症傾向						—	.38***	.43***	.45***	.11	-.17**	.25***
8. 注意制御不全感							—	.37***	.31***	.19**	.04	.03
9. 短気								—	.42***	.30***	.24***	-.03
10. 敵意									—	.33***	.04	.04
11. 身体的攻撃性										—	.21***	-.10
12. 言語的攻撃性											—	-.15**
13. 熟慮性												—

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

を検討するために、衝動的行動質問紙の各下位尺度得点を基準変数とし、外向性、神経症傾向、注意制御不全感、攻撃性（短気、敵意、身体的攻撃性、言語的攻撃性）、熟慮性を説明変数とした重回帰分析を行った（Table 4）。なお、多重共線性に関してはSASにおけるvifプロシジャを用いて検討し、問題がないことを確認した。

衝動買い行動に対して有意な影響が認められたのは熟慮性と身体的攻撃性であった。熟慮性

の有意な影響が認められた行動は衝動買い行動のみであり、熟慮性は衝動的行動全般に影響しているのではなく、衝動買い行動に特異的に関係するということが示された。この結果は、Gerbing, Ahadi, & Patton (1987) や Weun et al. (1998) による熟慮性が衝動的行動の中でも特に衝動買い行動を減少させるという報告と一致するものであった。さらに、衝動買い行動に対して身体的攻撃性が有意な正の影響を与えたことに関し

Table 4 衝動的行動質問紙の下位尺度得点を基準変数とし、特性変数を説明変数とした重回帰分析の結果

基準変数 説明変数	衝動買い 行動	身体的 攻撃行動	言語的 攻撃行動	物に あたる 行動	放棄・ パニック 行動
外向性	.06	-.02	-.01	-.11	-.08
神経症傾向	-.11	-.03	.14	.06	.38***
短気	.08	.08	.28***	.38***	.13
敵意	.01	.10	.05	-.12	.01
身体的攻撃性	.16*	.24***	.08	.25***	-.06
言語的攻撃性	.02	.03	.21***	.01	-.06
注意制御不全感	.14	.07	.04	-.05	.18**
熟慮性	-.15*	-.03	-.12	-.06	-.10
R^2	.14***	.14***	.32***	.25***	.31***

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ては、Parker & Griffiths (2004) が身体的攻撃性とギャンブルとの間の正の相関関係を示しており、ギャンブルと同様に金銭の浪費を含む衝動買い行動と身体的攻撃性が関係している可能性が考えられる。

身体的攻撃行動に対しては、BAQの下位尺度である身体的攻撃性が有意な正の影響を示した。身体的攻撃行動と身体的攻撃性はかなり近接した概念を測定していると考えられるにも関わらず、標準偏回帰係数はそれほど高いものではなかった。各尺度の項目を詳細に検討すると、本調査における身体的攻撃行動尺度では項目に示した行動を実際に起こした経験の有無に焦点を当てているのに対し、BAQの身体的攻撃性の尺度は身体的攻撃行動の経験というよりも“権利を守るためなら暴力もやむを得ないと思う”のような他者に暴力をふるうことに対する信念を測定していると思われる。その結果、身体的攻撃行動と身体的攻撃性との間にあまり強い関係性が見られなかったと推測される。

言語的攻撃行動に対しては、BAQの下位尺度である言語的攻撃性と短気が有意な正の影響を示した。言語的攻撃行動に対してもっとも強い影響を示したのは短気であった。身体的攻撃行動に対して短気は有意な影響が示さなかったことを考慮すると、言語的攻撃行動は身体的攻撃

行動よりも攻撃性の情動的な側面に影響を受けやすいことを示していると考えられる。また、言語的攻撃行動に対する言語的攻撃性の有意な正の影響が見られるが、身体的攻撃行動と同様にそれほど高い標準偏回帰係数は得られなかった。これは、BAQの言語的攻撃性が言語的な攻撃反応を含む自己主張や議論好きなどを測定する項目で構成されているのに対し、本調査で用いた言語的攻撃行動尺度は議論好きという要素を含んでいないことから両者の関係性が弱くなったと考えられる。しかしながら、BAQにおける身体的・言語的攻撃性と衝動的行動質問紙における身体的・言語的攻撃行動の概念に一部ズレがあったにも関わらず、身体的攻撃行動には身体的攻撃性、言語的攻撃行動には言語的攻撃性が有意な正の影響を示したことから、両尺度はそれぞれ別の行動を測定していると考えられる。

物にあたる行動に対しては、短気と身体的攻撃性が有意な正の影響を示した。この結果は、物にあたる行動はかっとなりやすい傾向と身体的な攻撃行動の起こしやすさによって特徴付けられる行動と考えられることから妥当な結果であると考えられる。また、短気は衝動的攻撃行動において言語的攻撃行動よりも物にあたる行動に対して強く影響していた。このことから、言語的攻撃行動よりも物にあたる行動の方がよ

り攻撃性の情緒的側面が強く影響することが考えられる。

放棄・パニック行動は、進行中の行動を止めてしまう、あるいはパニック状態に陥ってしまい、何をしているのかわからなくなるという項目で構成されているものであり、神経症傾向と注意制御不全感が有意な正の影響を示した。神経症傾向が高い場合、時間制限によるストレス操作がなされた状況では能力が制限されるということがWells(1994)やBchorowski & Newman (1990)によって報告されていることから、放棄・パニック行動と神経症傾向との関係性は妥当である。また、Dickman (1993) は実験的な課題を用いて、注意を移行させやすい性質と衝動的行動との関係性を報告しており、彼の研究で用いた課題で測定される衝動的行動は放棄・パニック行動を反映していると考えられる。このことから、衝動的な放棄・パニック行動と注意制御不全感との間に正の関係があることが十分に予測される。

本調査の結果、全体的に決定係数が低かったことから、本調査で使用したパーソナリティ特性のみでそれぞれの衝動的行動を説明することは困難であるが、衝動的行動によって影響するパーソナリティ特性に違いが見られることが明らかとなった。

総 合 考 察

本調査の結果から衝動的行動は少なくとも5つのタイプに分類できることが明らかとなった。さらに、衝動的行動のタイプの違いによって影響する変数（人格特性や行動特性）が異なることが示された。Evenden (1999) は動物研究において異なる側面を持つ衝動的行動は異なる神経メカニズムによって生じることを指摘し、Schmidt, Fallon, & Coccaro (2004) は衝動的行動にはさまざまな行動パターンがあることを報告している。しかしながら、衝動買い行動(Gerbing et al., 1987 ; Weun et al., 1998) や衝動的攻撃行動 (e. g., Convit et al., 1991 ; Houston & Stanford, 2005) のように衝動的行動の様々な側

面のどれかに焦点をしばった研究はあまり見られない。衝動的行動と他の変数との関係性を検討した多くの研究において一貫した関係性が得られてこなかったのは、本調査のように衝動的行動にはさまざまなタイプの行動があるにも関わらず、行動のタイプを分類せずに扱ってきたことに起因すると考えられる。

従来の多くの衝動的行動に関する研究では、衝動的行動の定義に“熟慮せずに行ってしまう行動”という要素が含まれている (e. g., Ainsle, 1975 ; Barratt & Patton, 1983)。しかしながら、本研究の結果から、すべての衝動的行動が熟慮しないという性質によって生じる行動とは考えにくい。また、衝動的行動と攻撃性に関しては、多くの研究で両者の間に正の関係性が示されてきたが、衝動的行動の中でも攻撃行動を含まない衝動買い行動や放棄・パニック行動に対しては攻撃性の影響はほとんど見られなかった。この結果は、Vigli-Colet & Codorniu-Raga(2004)の攻撃性と攻撃行動を伴わない衝動的行動との間に関係が見られなかったとする報告と一致するものである。このような点から、今後の研究では衝動的行動のタイプを分類して検討する必要性がある。

衝動的攻撃行動の中でも言語的攻撃行動と物にあたる行動では、攻撃性の下位尺度である言語的攻撃性や身体的攻撃性に加えて短気が正の影響を示し、敵意は有意な影響を示さなかった。この結果は、衝動的行動を考える上で重要であると考えられる。なぜなら、Barratt et al. (1997) やBerkowitz (1989) は不快情動によって生じる、非機能的で、認知を介さずに生じる攻撃行動を衝動的行動であると主張しているからである。つまり、本研究の結果に見られるように行動的側面である身体的・言語的攻撃性に加え、情動的な側面を持つ短気が正の影響を示し、認知的な側面を持つ敵意が有意な影響を示さなかったという結果は彼らの主張と一致していたからである。このことから、本研究で扱った言語的攻撃行動および物にあたる行動の下位尺度は衝動的攻撃行動の側面を捉えることに成功したと言

える。

本調査の結果、外向性と敵意はどのタイプの衝動的行動に対しても有意な影響を示さなかった。Edman et al. (1983) は外向性と衝動的行動との間に有意な関係性が見られなかったことを示しており、本研究の結果と一致している。Dickman (1990) は衝動的行動を機能的な側面と機能障害的な側面に分類して研究を行っている。彼の研究では、多くの研究で取り扱われているように、行動する前に熟慮することなく行動するためトラブルを起こしやすい性質を衝動的行動の機能障害的な側面とし、すばやく決断したり行動したりすることを好む性質を衝動的行動の機能的な側面と考えている。この分類に基づいて研究を行ったChico, Tous, Lorenzo-Seva, & Vigli-Colet (2003) は衝動的行動の機能障害的な側面よりも機能的な側面の方が外向性との相関関係が高いことを示している。このことから、外向性は本研究で扱ったような衝動的行動とは有意な関係性は見られなかったが、機能的な側面をもつ衝動的行動との間に関係が見られる可能性は残されている。また、敵意に関しては、Berkowitz (1989) やVigli-Colet & Codorniu-Raga (2004) も衝動的行動と敵意との間に有意な相関関係を見出しておらず、本研究の結果と一致している。彼らは、敵意のような認知的側面は多くの研究で用いられている衝動的行動に対しては影響しない可能性がある」と指摘している。したがって、本研究における衝動的行動と敵意との間に有意な関係性が認められなかったという結果は妥当であると考えられる。

Schmidt et al. (2004) は衝動的行動が行動の違いだけではなく状況の違いにも影響を受けるということを言及している。しかしながら、本調査では状況の設定を行っていないため、状況ごとに衝動的行動の起こり方や、他の変数との関係性を調べることはできなかった。こうした試みは、衝動的行動の本質をつかむ上で有益であると思われる。今後の研究では、本研究において作成した衝動的行動質問紙が実際にさまざま

な衝動的行動の生起を予測するかを検討する必要があると考える。

引用文献

- Ainslie, G. 1975 Specious reward: A behavioral theory of impulsiveness and impulse control. *Psychological Bulletin*, **82**, 463-495.
- 安藤明人・曾我洋子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- (Ando, A., Soga, Y., Yamasaki, K., Shimai, S., Shimada, H., Utsuki, N., Oashi, O., & Sakai, A. 1999 Development of the Japanese version the Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ) *The Japanese Journal of Psychology*, **70**, 384-392.)
- Bachorowski, J. A. & Newman, J. P. 1990 Impulsive motor behavior: Effects of personality and goal salience. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 512-518.
- Barkley, R. A. 1997 *ADHD and Nature of Self-control*. The Guilford Press: New York.
- Barratt, E. S. & Patton, J. H. 1983 Impulsivity: Cognitive, behavioral and psychophysiological correlates. In M. Zuckerman. (Ed.), *Biological bases of sensation seeking, impulsivity, and anxiety*. Hillsdale, NY: Lawrence Erlbaum. pp.77-116.
- Barratt, E. S., Stanford, M. S., Kent, T. A., & Felthous, A. 1997 Neuropsychological and cognitive psychophysiological substrates of impulsive aggression. *Biological Psychiatry*, **41**, 1045-1061.
- Berkowitz, L. 1989 Frustration-aggression hypothesis: Examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.
- Buss, A. H. & Perry, M. 1992 The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 452-459.
- Chico, E., Tous, J. M., Lorenzo-Seva, U., &

- Vigli-Colet, A. 2003 Spanish adaptation of Dickman's impulsivity inventory: Its relationship to Eysenck's Personality questionnaire. *Personality and Individual Differences*, **35**, 1883-1892.
- Convit, A., Czobor, P., & Volavka, J. 1991 Lateralized abnormality in the EEG of persistently violent psychiatric inpatients. *Biological Psychiatry*, **30**, 363-370.
- Crean, J. P., de Wit, H., & Richards, J. B. 2000 Reward discounting as a measure of impulsive behavior in a psychiatric outpatient population. *Experimental and Clinical Psychopharmacology*, **8**, 155-162.
- Dickman, S. J. 1990 Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 95-102.
- Dickman, S. J. 1993 Impulsivity and information processing. In W. G. McCown, J. L. Johnson, & M. B. Shure (Eds.), *The impulsive client: Theory, research, and treatment*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 151-184.
- Dougherty, D. M., Bjork, J. M., Marsh, D. M., & Moeller, F. G. 2000 A comparison between adults with conduct disorder and normal controls on a continuous performance test: Differences in impulsive response characteristics. *Psychological Record*, **50**, 203-219.
- Edman, G., Schalling, D., & Levander, S. E. 1983 Impulsivity and speed and errors in a reaction time task: A contribution to the construct validity of the concept of impulsivity. *Acta Psychologica*, **53**, 1-8.
- Evenden, J. L. 1999 Varieties of impulsivity. *Psychopharmacology*, **146**, 348-361.
- Eysenck, S. B. G., Pearson, P. R., Easting, G., & Allsopp, J. F. 1985 Age norms for impulsiveness, venturesomeness, and empathy in adults. *Personality and Individual Differences*, **6**, 613-619.
- Gerbing, D. W., Ahadi, S. A., & Patton, J. H. 1987 Toward a conceptualization of impulsivity: Components across the behavioral and self-report. *Multivariate Behavioral Research*, **22**, 357-379.
- Houston, R. J. & Stanford, M. S. 2005 Electrophysiological substrates of impulsiveness: Potential effects on aggressive behavior. *Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry*, **29**, 305-313.
- Kagan, J. 1965 Individual differences in the resolution of response uncertainty. *Journal of Personality and Social Psychology*, **2**, 154-160.
- Malle, B. F. & Neubauer, A. C. 1991 Impulsivity, reflection, and questionnaire response latencies: No evidence for a broad impulsivity trait. *Personality and Individual Differences*, **12**, 865-871.
- Mischel, W., Shoda, Y., & Rodriguez, M. L. 1989 Delay of gratification in children. *Science*, **244**, 933-938.
- Parker, A. & Griffiths, M. 2004 Aggressive behavior in slot machine gamblers: A preliminary observational study. *Psychological Reports*, **95**, 109-114.
- Parker, J. D. A., Bagby, R. M., & Webster, C. D. 1993 Domains of the impulsivity construct: A factor analytic investigation. *Personality and Individual Differences*, **15**, 267-274.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. 1995 Factor structure of the Barratt Impulsive Scale. *Journal of Clinical Psychology*, **51**, 768-774.
- Schmidt, C. A., Fallon, A. E., & Coccaro, E. F. 2004 Assessment of behavioral and cognitive impulsivity: Development and validation of the Life History of Impulsive Behaviors Interview. *Psychiatry Research*, **126**, 107-121.
- Shapiro, K. L., & Lim, A. 1989 The impact of

- anxiety on visual attention to central and peripheral events. *Behavior Research and therapy*, **27**, 345-351.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 1999
NEO-PI-R, NEO-FFI共通マニュアル(成人・大学生用) 東京心理
(Shimonaka, J., Nakazato, K, Gondo, Y., & Takayama, M.)
- 篠原一光・小高恵・三浦利章 2002 注意制御に係る日常経験についての研究 日本人間工学会
関西支部大会講演論文集, 74-77.
(Shinohara, K., Kotaka, M., & Miura, T.)
- 滝間一嘉・坂元章 1995 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会発表論文集, 81-82.
(Takigiku, K, & Sakamoto, A.)
- Vigil-Colet, A. & Codorniu-Rega, M. J. 2004
Aggression and inhibition deficits, the role of functional and dysfunctional impulsivity. *Personality and Individual Differences*, **37**, 1431-1440.
- Wells, A. 1994 A multi-dimensional measure of worry: Development and preliminary validation of the anxious thoughts inventory. *Anxiety, Stress and Coping: An international Journal*, **6**, 289-299.
- Weun, S., Jones, M. A., & Beatty, S. E. 1998
Development and validation of the impulse buying tendency scale. *Psychological Reports*, **82**, 1123-1133.